

た。ヘルニアの併存はなく、腹腔側からの観察でもヘルニア門は明らかではなかった。

外鼠径ヘルニア類似の症状を示した脂肪腫の一例を経験したので報告した。

4) 腎透析患者の食道手術の経験

蛭川 浩史・穂苅 市郎
篠原 博彦・豊田 精一
相馬 剛 (新潟労災病院外科)

腎透析患者では組織の脆弱性、易感染性、易出血性、水分バランスの変化等手術に対し不利な要素が多い。我々は腎透析患者に対する食道癌手術を経験した。症例は糖尿病性腎症により昭和59年より(15年間)人工透析を受けている65歳男性。gastric ca. (A) Post, O-II cT1 (M), esophageal ca. (Im, Iu) 1型, A1に対し胃粘膜切除、及び非開胸食道抜去術、頸部食道胃吻合術(anterior thoracic route)を施行した。手術では食道周囲の剥離の際に縦隔鏡を使用し、術中の止血操作を確実にを行うように努めた。また Swan-Ganz catheter を挿入し、術直後より嚴重な循環動態や水分出納、電解質の管理を行った。CVP は40~140 mmH₂O, CO は5.2~8.8 L/min であった。これらのデータをもとに透析の除水量を決定し、周術期を安全に乗り越えることができた。腎透析患者では水分バランスの小さな変化が循環動態や臨床症状の変化として現れきめ細かな管理が必要と思われた。しかし嚴重な管理により、安全に周術期を乗り越えることは可能であると考えられた。

5) upside down stomach, gastric volvulus を来した成人 Bochdalek 孔ヘルニアの2例

篠川 主・中塚 英樹
藤田みちよ・野上 仁
三間智恵子・鱒淵 勉 (南部郷総合病院)
佐藤 巖 (外科)

稀な成人 Bochdalek (以下 Bo) 孔ヘルニアの2例を報告する。

症例1: 46歳男性。平成9年12月9日左季肋部痛、嘔吐、後頸部痛で当院受診。縦隔気腫あり、横行結腸も含む食道裂孔ヘルニアと診断した。術中ヘルニア嚢を有する右側 Bo 孔ヘルニアと判断し、ヘルニア門の閉鎖とヘルニア嚢ドレナージ術を施行した。

症例2: 20歳女性。平成10年2月5日昼食後左上腹部

痛あり近医より紹介され、左 Bo 孔ヘルニアと診断しレビン管留置でヘルニアは整復したが、ヘルニア門の閉鎖と左胸腔ドレナージ術を施行した。2例とも upside down stomach, gastric volvulus を来していたが術後経過良好。

結語: 本疾患の軽症例は意外に多いとの報告もあるが、術後死亡例もあり、有症状例はヘルニア門の閉鎖術が必要である。

6) 新生児期発症の Nesidioblastosis の1治療例

山崎 哲・八木 実
飯沼 泰史・内藤万砂文
内山 昌則・岩淵 眞 (新潟大学小児外科)

症例は生後1ヶ月の女児。出生直後より低血糖症状を認め高濃度糖質輸液を開始したが改善無く精査の結果、高インスリン血症と診断。ジアゾキサイド、ステロイド投与開始するも時に低血糖を認めたため当院小児科転院。ソマトスタチン投与等の保存的治療開始したが無効のため外科治療目的に当科転科となり Nesidioblastosis として95%膵切除施行した。組織学的にび慢性型の Nesidioblastosis であった。周術期の血糖値は不安定であったが、その後空腹時血糖値80~100 mg/dl と著明に改善され退院となり、現在外来経過観察中である。

7) BCG 接種後の腋窩リンパ節炎の2例

内藤 真一・新田 幸壽 (新潟市民病院)
山崎 哲・鈴木 孝明 (小児外科)

乳幼児ではしばしば身体各部位のリンパ節腫脹が見られることが多いが、その大部分は病的なものではなく、経過観察にて軽快することが多く、細菌感染などにより切開を要するよう化膿性リンパ節炎は稀なものである。一方、BCG 接種後に所属リンパ節である腋窩リンパ節に腫脹を来してくる例があるが、これも BCG 接種後であることがはっきりしていれば自然消退することがわかっており、外科的に切開を要することはまれといわれている。今回、腋窩腫瘍を主訴に来院し、BCG 接種後であることに気づかずにリンパ節生検を行なった2例を経験したので、報告する。

8) 非腫瘍性卵巣茎捻転の2例

鈴木 律子・大沢 義弘 (太田西ノ内病院)
近藤 公男 (小児外科)

非腫瘍性卵巣茎捻転の2例を経験したので報告する。症例は12歳と8歳で、ともに下腹部痛で発症し、エコー、CTにてダグラス窩に腫瘤を認めたため手術を施行した。手術所見は、いずれも著明な血行障害を伴う右卵巣卵管茎捻転であった。卵巣卵管の温存は不可能で摘出した。摘出卵巣の組織学的所見は出血性壊死で、腫瘍性病変は認めなかった。

小児における非腫瘍性卵巣茎捻転は稀であるとおもわれ、その特徴、原因を中心に考察する。

9) 当科における胆道閉鎖症の治療経験

高野 邦夫・中込 博
腰塚 浩三・武藤 俊治
西尾 徹・渡辺 一晃
三宅 知雄・毛利 成昭 (山梨医科大学)
桜井 裕幸・荒井 洋志 (第二外科)
大矢 知昇・多田 祐輔
大沢 義弘 (太田西ノ内病院)
(小児外科)

1990年より当科にて治療を行った胆道閉鎖症は9例で、8例を当科で手術を行い、他の1例は8歳時に肝不全状態で紹介されその後治療を継続している。当科で手術を行った8例中2例が総胆管閉塞例であったが、術後胆管炎とともに失った。他の6例は肝門部閉塞型で、全例肝門部空腸吻合を行い当初は駿河Ⅱ法で再建していたが最近ではⅠ法にて行い、順調な経過が得られている。現時点で減黄例は5例(62.5%)。本疾患治療にあたって新しく試みた治療法を紹介するとともに、我々の反省点のべ、当科における胆道閉鎖症の治療経験を報告する。

10) 周産期に発症した鼠径部静脈瘤の一例

末広 敬祐・神田 達夫
佐々木正貴・鈴木 力 (新潟大学第一外科)
畠山 勝義 (同 産科)
関塚 直人・渋谷 伸一 (同 産科)

鼠径部静脈瘤は比較的にまれな疾患であり、術前診断は困難なことが多い。鼠径部静脈瘤の一例を経験したので報告する。

症例は33歳の女性。妊娠8か月後半に母指頭大の左鼠径部の膨隆及び圧痛を自覚。産後(正常経産分娩)2日目に膨隆は鶏卵大の硬結となり、圧痛も著明となった。鼠径ヘルニアの嵌頓と診断され、同日、緊急手術施行。

ヘルニアはなく、硬結は円靭帯の血栓性静脈瘤であり、鼠径管内及び大腿部の静脈瘤を切除した。

鼠径・大腿ヘルニア嵌頓を疑った場合、妊娠及び産褥期間中では、鑑別診断として円靭帯の静脈瘤も念頭に入れておく必要がある。

11) 盲腸癌術後二日目に発症した肺動脈血栓塞栓症の一例

齋藤 義之・田邊 匡
中川 悟・大川 彰 (秋田組合総合病院)
遠藤 和彦 (外科)
金澤 明彦 (同 循環器科)

肺動脈血栓塞栓症(PTE)は突然発症し時に致命的となり得る術後合併症の一つである。症例は73歳女性。循環器疾患の既往なし。盲腸癌にて全身麻酔下に回首部切除術を施行したが、術後二日目に血圧低下と嘔吐・呼吸困難で発症した。発症後早期に肺血流シンチグラフィ・肺動脈造影からPTEと診断し、ウロキナーゼによる血栓溶解療法とヘパリン・ワーファリンによる抗凝固療法を施行した。低酸素血症や循環動態に改善傾向が認められ、治療後の経過は良好であった。このような症例の救命率向上のためには発症後早期の迅速かつ的確な診断と治療が重要である。

12) 骨盤原発軟骨肉腫術後の11年目に多発性肺転移を肺部分切除した1症例

平原 浩幸・相馬 孝博 (長岡中央総合病院)
(胸部外科)

症例は71歳、女性で1987年6月左骨盤の軟骨肉腫の診断で他院にて広範切除術を施行された。1997年3月24日意識障害となり、脳腫瘍内出血で、腫瘍切除術施行され軟骨肉腫の脳転移と診断された。このとき多発性肺転移を指摘され、1997年10月13日の胸部CTにて肺転移巣の急激な増大を認めたため、1998年1月21日胸骨正中切開により両側肺部分切除を行い7個の腫瘍を切除した。組織は骨盤、脳転移、肺転移いずれも同様にmyxoid chondrosarcomaの像を示し、核分裂像をわずかに認め、辺縁に細胞成分の増加を認めEvansの病理分類のⅡ度であった。軟骨肉腫は原発巣が完全切除されれば長期生存が望めるが、遠隔転移が予後を不良にする要因である。組織学的に低悪性度の場合は遠隔転移の制御により長期生存が期待できる。